

「隼ちゃんの死 無駄にしない」

わりばし事故 母親が手記を刊行

わたアメのわりばしがのどに刺さる事故で、昨夏亡くなった東京都杉並区の杉野隼三ちゃん(当時四つ)の母親で、高校教諭の文栄さん(四三)が、手記を出した。病院に対する不信感と、息子を失ったことの無念さ。胸がつぶれそうになったとき、乗り越える力をくれたのは、家族や教え子たちだった。収入はすべて、「隼ちゃん基金」に積み立て、福祉施設などに寄付する考えだ。

手記のタイトルは「『割り箸が脳に刺さった我が子』と『大病院の態度』」(小学館文庫)。

隼三ちゃんは昨年七月、盆踊り大会でわりばしが刺さり、杏林大学付属病院に運ばれたが、十五時間後に亡くなった。司法解剖で脳に七・六センチのわりばしが残っていたことがわかり、一年後、診察した医師が業務上過失致死の疑いで書類送検された。だが、しばらくして、病院からの文書には、「過失はありませんでした」とあった。

「これから私たちはこの病院と戦おうとしている。」

そう思うと恐ろしさと不安で震えが止まらなくなってきた。

「隼三の死を、無駄にしないで」と、二週間ほどで、一年間の思いを手記にした。



まとめた。隼三ちゃんが亡くなる場面は、泣き声が漏れないように、タオルを口にくわえながら書いた。

医師に「救命できたとしても植物状態になっていただろう」と言われた時のことを、「それくらいなら救命できなくてよかったでしょうと言われているように感じた」と書いている。

手記には、病院の対応に傷つきながらも、周囲の人の優しさに触れて、立ち直ろうとする家族の姿がつつく感じている。

「読んでくれた人の心の中に隼三が生き続けてくれることを願っています」と、杉野文栄さん(東京都杉並区)の自宅。

生まれてから。隼三ちゃんの誕生日には、ボランティア団体のほからいで、大好きなウルトラマンガイアが自宅を訪れた。かつての教え子は、残された隼三ちゃんの兄を元気づけようと、毎日のように一緒に鉄道模型で遊んでくれた。励ましの手紙は、二百通になった。

「悲しみは決して癒されることがなかったが、こうした人たちのためにも頑張らなければいけないと、強く感じていた」

文栄さんは、ときには生徒たちにも隼三ちゃんの話をしてほしい、と思っている。「家族を失うことがどんなに苦しいことか、命がどんなにかけがえのないものか、きっとわかってくれることだろう」

手記は、最後に隼三ちゃんへの手紙で締めくくられている。

「しゅんちゃんは正義の味方になりました。たんだもんね。その大事な夢をきくと呼ばれてあげるからね」